

Title	京大広報 No. 131
Author(s)	
Citation	京大広報 (1976), 131: 592-594
Issue Date	1976-12-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/209560
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 131

京都大学広報委員会

文化功労者に貝塚茂樹名誉教授



貝塚茂樹名誉教授は昭和51年度の文化功労者に選ばれ、11月4日、顕彰を受けられた。

同教授は明治37年5月1日、東京都に生れた。昭和3年3月、京都帝国大学文学部史学科を卒業後、昭和7年5月より東

方文化研究所研究員、昭和23年1月、氏の中国古代史研究に対して昭和22年度の朝日文化賞が授与された。同年4月、東方文化研究所が京都大学人文科学研究所に改組されるに伴い、同研究所研究員、昭和24年4月、京都大学教授になり、中国史部門を担当した。さらに同年から6年間に亘って人文科学研究所長を勤めた。昭和36年11月、文学博士の学位を得、昭和37年11月、著書「諸子百家」により同年度の毎日出版文化賞が与えられた。昭和43年3月、停年により退官し、京都大学名誉教授として今日に至っている。

この間、終始研究に専念したことは勿論であるが、人文科学研究所の教授に就任後は学内外の中国学研究者を集めての共同研究を主宰し、研究方法に新機軸を開くとともに中国史の分野において多数の業績を発表し、学界に貢献した。なかでも特に顕著なものは「中国古代史学の発展」「京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字」（図版冊、釈文、索引）である。中国古代史の研究は、わが国では従来、文献による研究のみが行われ、甲骨卜辞や金文などの出土資料はほとんど顧みられなかったが、博士はこれらの新資料の重要性に着目し、上記二著において甲骨、金文が最も信頼できる資料

であることを明らかにし、現在の古代史研究の研究方法を確立した。

このような研究から得られた斬新な知識をもって中国古代史を体系的にとらえた著作として、「中国古代の精神」「孔子」「中国の古代国家」「中国古代のこころ」「諸子百家」等があるが、博士の業績はひとり古代史にとどまらず、新中国の成立に関連して「毛沢東伝」をはじめ、「古い中国と新しい中国」「中国の伝統と現代」「中国の歴史」等において独自の見解を発表している。これらは現在刊行中の「貝塚茂樹著作集」（全10巻、別巻1）に集録される予定である。

上のような学問的業績に対して、文化功労者の栄誉を受けられたことは喜ばしいことである。

（人文科学研究所）

小葉田淳名誉教授、塚本善隆名誉教授、広中平祐教授日本学士院会員に選ばれる

本学名誉教授小葉田淳、同塚本善隆及び数理解析研究所教授広中平祐の各氏は、このたび日本学士院会員に選ばれた。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

小葉田淳名誉教授



教授は福井県出身、昭和3年京都帝国大学文学部史学科（国史学専攻）を卒業、昭和5年台北帝国大学文政学部助教授として赴任され、敗戦後は国立台湾大学副教授に留用を受けたのち、昭和21年末に帰国、本学講師・

東京文理科大学教授を経て、昭和24年11月文学部教授となり、戦後打撃を受けた国史学講座の再建に尽力された。昭和44年停年退官の後には、龍谷大学教授・京都女子大学教授を歴任された。この間、昭和44年には、著書「日本鉱山史の研究」に結晶した研究成果に対して日本学士院賞が授けられている。

教授の業績は、日本中・近世史における貨幣・貿易・鉱山業の全般にわたっている。卒業論文を基にした「日本貨幣流通史」から、台北時代は、日明貿易を中心とした「中世日支通交貿易史の研究」、琉球をめぐる東アジア貿易を解明した「中世南島通交貿易史の研究」と、次々に大著をものされた。

それらは、いずれも日本のみならず、中国・朝鮮の文献史料を博搜・駆使したすぐれた労作であるが、われわれ後進を鼓舞してやまないのは、教授が敗戦後の引揚げによって、長年にわたり蓄積された資料のすべてを失われながら、帰国後、日本の農山漁村に埋もれた古文書類を渉猟され、前人未踏の鉱山史研究を確立されたその気力である。

16世紀の30年代以降、日本が世界有数の銀産国に転じ、日本銀の流通が鎖国に至る時期の東アジアの貿易・通交に及ぼした影響は甚大なものがある。それ自体、近著「金銀貿易史の研究」に明らかのように、教授独創の領域に属するが、教授はこれを生産・経営・支配の実態究明にまで深められた。国際歴史学会議で報告をもとめられたことが示すようにその研究は国際的にも注目を惹いている。

(文学部)

塚本善隆名誉教授



教授は愛知県出身、大正12年京都帝国大学文学部哲学科選科を、大正15年同史学科選科を修了の後、昭和4年5月東方文化学院京都研究所研究員になられた。同研究所はその後、東方文化研究所と改称され、昭和23年4

月に本学人文科学研究所に吸収されたが、その間ひきつづき研究員として中国仏教史の研究に専念され、昭和24年4月本学人文科学研究所教授になられて以後、昭和36年2月退官まで中国思想宗教研究部門を担当された。またその間、人文科学研究所長に併任された。

本学退官後は10年以上にわたって国立京都博物館長の重職にあり、昭和47年3月同館長を退官後は、私立華頂短期大学長兼仏教大学教授として今日に至っている。

教授の業績は多岐にわたるが、とくに中国仏教史研究における貢献が著しく、従来の護教的立場からする研究態度を改めて、真に史学的方法にもとづく仏教史学を確立されたことは、画期的な業績といわねばならない。「唐中期の浄土教」「支那仏教史研究・北魏篇」をはじめとする多数の著書論文は、本年3月に完結した「塚本善隆著作集」(全7巻)にまとめられているが、それらの著作は、人文科学研究所共同研究班を主宰された時期の成果「肇論研究」「慧遠研究」とともに、斯学の基礎をすえると同時に、その飛躍的な発展をもたらしたものとして、国内はもとより、国際的にも極めて高く評価されている。

また教育の面での貢献はいうまでもなく、さらに本学および国立京都博物館長在職中を通じて、中国をはじめ諸外国の学界・文化界との交流につとめた功績も多大である。

(人文科学研究所)

広中平祐教授



教授は山口県出身、昭和29年本学理学部数学科を卒業、本学大学院理学研究科修士課程数学専攻に入学、昭和31年同課程を修了後、博士課程に進学したが、昭和32年8月同課程を退学して、米国ハーバード大学大学院に入学し、昭和35年に修了した。同年ブランダイス大学講師に就任、同大学助教授、准教授を経て、昭和39年7月コロンビア大学教授、昭和43年7月ハーバード大学教授を歴任し、昭和50年11月に本

学数理解析研究所教授に就任して現在に至っている。

教授の業績は数学の広い分野にわたっているが、代数幾何学および解析幾何学における貢献は極めて重要なものである。なかでも、代数多様体および解析空間の特異性解消の理論は、長年の懸案を解決したものであるとともに、理論的にも、応用上からも、数学のこの方面の今後の研究の基礎となっている。

教授はこれらの業績によって、昭和45年5月に日本学士院賞、8月にはフィールズ賞を受け、昭和50年には文化勲章を受けられた。

教育の面でも教授の貢献は大きい。上記の略歴にあるように、多くの大学に奉職し、多くの優秀な研究者を指導育成された。直截的に本質に迫る教授の独創的な方法とその輝かしい成果は、国際的に高い評価を受けている。

(数理解析研究所)

11月10日の捜査について

11月10日(水)京都府警察本部による捜索・検証があった。

この日の捜査は、11月9日(火)午後4時50分頃、本部構内時計台前付近で起った乱闘にかかわる暴力行為等処罰に関する法律違反、凶器準備集合及び傷害被疑事件について突然行われたもので、本学からは、学生部長、教養部長、文学部長代理等が立会人となり、午前1時20分頃から逐次始まり、同3時15分頃迄に終了した。

捜索は、教養部尚賢館、文学部学友会ボックス、西部構内の同学会ボックスについてなされた。

なお、本部構内時計台前広場から工学部8号館に至る空地及びその周辺が検証された。

白馬山の家開設について

毎年、利用者から好評を受けている白馬山の家を、今冬は下記のとおり開設いたしますので、本学の学生および教職員が利用される場合は、下記を参照のうえ、申し込んでください。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つが}の梅池^{いけ}高原にあり、四方を北アルプスの峰々に囲まれ、冬季には積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えています。

なお、建物は、山小屋風の木造地上2階地下1階建て、1階が食堂兼談話室、2階が寝室(ベッドで42名収容)、地階が浴室・乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学白馬^{はくば}山の家
2. 所 在 地 長野県北安曇郡小谷村大字千国^{ちくに}字柳久保乙869の2

(交通機関)

国鉄大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 12月20日(月)～1月20日(木)
ならびに2月20日(日)～4月10日(日)
4. 所要経費 1人1泊、使用料80円、暖房料50円、ほかに食費等実費程度
5. 申 込 み 本学体育会事務室
6. 備 考 山の家のある梅池高原には、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

なお、利用に関する詳細は体育会事務室(電話学内2574)に照会してください。

(学生部)